

和

文典

中

書門部
三
祭
法
號

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄第	號
語學	門部
日本語	部
文法	項
目	次
全	冊ノ内第
分類第	25751 號
分番	815

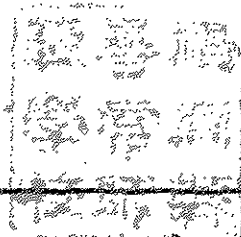
T1A3
11
0 93

圖書 和図書 遡



a 1 3 8 0 3 2 8 9 5 8 a

福岡教育大学蔵書



和文典中巻

大和田建樹 著

第二編 語格

音と字とによりてあらわれたる單一の意を詞（又ハ語）といふ。この用ひ方を教ふるを語格といふ。

七品詞

和文典中巻

第二編 語格 名詞

一

意よりて詞を分類すれば七つとある。之を七品詞といふ。
名詞。動詞。形容詞。副詞。後詞。接續詞。感詞これあり。
名詞 物事の名をさす詞を名詞といふ。これを實名詞。代名
詞の二つに分つ。

實名詞 實名詞は直にその名をさす詞にて。有形無形
を問はぬ。狭き廣きを言はぬ。すべて五感に觸れ心は觸る
る物事の名なり。すなはち。

人 犬 花 音樂 讀書 人磨
義經 富士山 清水寺
の類あり。

代名詞

代名詞は實名詞の代りをつとむる詞にて。人

の名にかゝるを人代名詞といひ。人または物事をさし示
すを指示代名詞といひ。問をしめすものを疑問代名詞と
いふ。

人代名詞は

あ あれ
わ われ

以上は自をさす。之を一人稱の代名詞といふ。

か かんぢ
かれ みまし

以上は相對する人をさす。之を二人稱の代名詞とい
ふ。

自よても相對するふてもなき人をさすをば。三人稱の代名詞といふ。それよつ次の指示代名詞を用ふるなり。

二人稱三人稱の代名詞を用ふべき處ふ。一人稱を用ふる事あり。すまはち。

わが御心ひとつよはまゐるうおがしわく事もありけり(源氏)

めのその身もひえはてゝわれよもあらで居たり(空總)

われも人も馬よのりて(宇治)の類々。まばらく其人ふなりて用ひたる詞と知るべし。

右の外ふ。人を尊び自を卑下する意よて實名詞を偕り用ふる事あり。之を實名詞狀代名詞といふ。

みづから 身 身ども

わらは(女ふ用ふ) 愚僧(僧ふ用ふ)

拙者 小生

以上の一人稱

君 おん身 お事

主 貴殿

以上の二人稱

陛下 殿

以上の三人稱

の類なり。但し「身。を。す。て。仁。を。な。す。」「わ。ら。は。な。り。し。時。」
おどの。名詞と思ひまがふべからむ。

指示代名詞の

こ
これ
こ、(場處に用ふ)

以上の手は取りたるほどの近さをさす。

そ
それ
そこ(場處に用ふ)

以上の目前の人の持ちたるほどの近さをさす。

か
かれ
かしこ(場處に用ふ)

あ
あれ
あそこ(場處に用ふ)

以上の手のとむかぬ遠さをさす。あ。よ。り。い。か。の。方。少。し。
つよくたしかあり。

疑問代名詞の

た
たれ

以上の人は用ふ。

いづ
いづち
いづに(場處に用ふ)

いつ(時に用ふ)

以上の物事を用ふ。

いづれ

これはおやくの人。またの物事を問ふは用ふ。

右の代名詞よりの。とがその詞は續くべき定まりあるもの左の如し。この外いづれはも續くべきものと知るべし。

た	あ	わ	あ
	(人)		
か			
	あ	か	
	(指)		
	の		

熟字名詞

二つ以上の詞を合せて一つの名詞とせる

ものを熟字名詞といふ。すきはち。

わかまつ

あらなみ

はるかぜ

名月

和漢

儉約

の類あり。

今之をいひかへてわかうめ。あらうみ。あつかぜ。名目。漢和。約儉など、せば語を成さるべし。これにて熟字たるを知るべし。

動詞 物事のはたらきをあらはす詞を動詞といふ。動詞を

自動詞。他動詞。助動詞の三つに分つ。

自動詞

自動詞のみづから獨してはたらく詞をいふ。

すきはち。

さくらちる。この下風に寒からで

空ふ知られぬ雪ぞふりける (古今)

霜いと白うおけるあした。やり水より烟のたつこそ
をかしかれ (徒然)

の例ふつきていひ。ちるの櫻の獨して散るあり。寒から
での風のたゞひとり寒からぬあり。ふりけるの雪の獨し
て降るあり。又おけるの霜の獨しておけるあり。立つの烟
の獨して立つなり。故に之を自動詞とす。

自動詞の内ふ獨立して用ひがたき あり。之を不完全動
詞といふ。名詞の下ふおく「なり」「たり」の詞これあり。す
なひち。

尾張のかねとさのむすめの腹をりけり。(枕草紙)

古き墳おそくこれ少年の人なり。(つれづれ)

我のわれたり汝の汝たり。

の類あり。

他動詞

他動詞の外はたらきを及ぼす詞をいふ。こ
れにかからざるを文字もちたる名詞は接するを常とす。詞
ふあらぬ時のその詞をおきて見るべし。すなひち。

袖ひちてむすびし水の氷れるを

はるたつけふの風やとくらん (古今)

よろづの事の月みるよこそなぐさむものをれ (つれ

づ)

の例ふていひ。ひちてのわれといふ主より袖ふはたら

きを及ぶす詞にて。袖をひちてとつゞく法あり。とくらん
の風といふ主より氷れる水はたらきを及ぶす詞にて。
氷れる水を。とく。とつゞく法あり。見る。人といふ主より
月。はたらきを及ぶす詞にて。月をみる。とつゞく法あり。
このはたらきを受くるものと。その主たるものと。位を轉
倒して形をかへたるを被然言といふ。すなわち「君は松を
ひく」といふを轉倒して。

千歳まで限れる松もけふよりの

きみはひかれて万代やへん（拾遺）

の類にて「人は養はるゝ」「人よりやまはるゝ」などすべて
これあり。

また形の同じくて。主たるものゝ外は自然のはたらきを
あらわすを自然言といふ。これに自動詞他動詞の別あ
く。すべておのづからといふ詞をおきて見るべし。すな
わち。

かくても（おのづから）有られけるよ。（つれづれ）

筆をぞれば（おのづから）ものかゝれ。（同）

の類あり。

但しもとより定まりたる形にて。自然言の意ある詞は自動詞にて。この
種類ふにあらす。「見ゆる」「折るゝ」の類あり。おもひまがふべからず。

左ふ以上の四つのいひかたを。いさゝかあらべあぐべし。
詞のあきどころの例なきものと知べし。

自動詞	他動詞	被然言	自然言
見ゆ	見る	見らる	見らる
聞こゆ	聞く	聞かる	聞かる
驚く	驚かす	驚かさる	驚かる
	得	得らる	得らる
乾く	乾かす	乾かさる	
過ぐ	過ぐす	過ごさる	過ぎらる
砕く	砕く	砕かる	
解く	解く	解かる	
立つ	立つ	立てらる	立たる
出づ	出だす	出ださる	出でらる

醒む	醒ます	醒まさる	醒めらる
下る	下ろす	下ろさる	下りらる
	思ふ	思はる	思はる
切る	切る	切らる	切らる
折る	折る	折らる	折らる

右の例ふて被然言。自然言いかからず末音ふる。音を持ちたるを知るべし。

助動詞 常の動詞のみふてい。其意をほたしかからぬ事あり。その時あそふ詞をそへて之を助くるを。動助詞といふ。さまば助動詞の動詞の半身ふて。獨立せざる詞と知るべし。

その種類左の如し。

其一 時をあらわす

き 次の帝桓武天皇と申しき。(水鏡)

八月小奈良の京へ行幸侍りき。(同)

あれいゝしゝある過去に用ふ。

ぬ 年もゝへりぬ。(枕草紙)

人々まゐりつれば夜もふけぬ。(紫日記)

つ 瀧口をどしておひつかいしつ。(枕草紙)

門の外ふひきすてつ。(同)

右のぬ。そつ。いや、よわき過去に用ふ。この二つの差別はぬ。い多く自動詞に用ひ。つ。い多く他動

詞に用ふ。されど上の動詞の音調はしたがいひて。

あながちに拘るべからず。ぬ。いよわくつ。いっつよし。

たり 前裁いみじうをかしく植ゑたり。(今昔)

物見車ところなく立ちあをりたり。(同)

り 五月れつぶもりふ雪いと白う降りり。(伊勢)

薬もくいずやがて起たもあがらで病みふせり。(竹取)

右れたり。とり。いなかを過去にあらは現在なるに用ふ。されど音調によりてい例の拘まるべからず。

けり 笛をもえならむ吹きけり。(今昔)

むかし男ありけり。(伊勢)

これいさ。又はたりの餘情を舍みたる不用ふ。されどたぐたりの輕きよも用ふるあり。

其二 自他の類をあらはす

る 民のうれひ國のそこをいるゝをも知らず。(つれづれ)

かけをきおさるゝこそ本意なけれ。(同)

らる かばかりの事のうち思ひ出でらるゝもあり。

(紫日記)

心おとりせらるゝ本性。(つれづれ)

右のる。とらるゝ共は被然言。自然言の形を助くるものあり。

す 妻の女よあづけて養はす。(竹取)

さす 名をみむろといんべのあまたを呼びてつけさす。(竹取)

世の人よも似ぞぞ侍ると奏せさす。(同)

しむ こゝろたまり入り給へといひしむ。(今昔)

およぶとよかあるらんと思ひて人をもてといひしむ。(同)

右のす。とさす。としむ。とい共は他動詞の形を助くるものあり。

其三 尊ぶと卑下するをあらわす。之を敬語といふ。

給ふ 光仁また傍より撰ばれて立ち給ふ。(正統記)

常よりもことようつくしうど見え給ふ。(増

鏡)

ます 御さいはいいみじうおはします。(榮花)

せ 鞠のかゝりあるかとへわたらせ給ふ。(増鏡)

和琴一つとてまつらせ給ふ。(同)

させ 上も常は物御らんじふ出でさせ給ふ。(枕草

紙)

春宮行啓中門よりたりさせ給ふ。(増鏡)

この二つ。給ふ。らる。おはします。かどの詞の

前はおきてのみ用ふ。

る 日高く題を給ひてかたく問ひる。(空穂)

御袈裟の箱を御をばふおかる。(増鏡)

らる 御經の筥二合。金泥の壽命經九十卷。法華經入

れらる。(増鏡)

しろがねの箱ふ入れてまゐらせらる。(同)

奉る 釋迦如来の繪像かけ奉る。(増鏡)

御口は水をすくひ入れ奉る。(竹取)

侍り 昔ものがたりめきて覺は侍りし。(源氏)

山里はこもり侍りけるよ。(古今)

候ふ いかゞ此屋の内へ案内まをし候ふ。(謡)

たゞ今みやこよのなり候ふ。(同)

申す 此の内は仕へ申す者にて候ふ。(謡)

尋ね申すも餘の儀はあらむ。(同)

聞ゆ いそぎ野のやうふなりて尋ねきふゆべき方も

あかりしかば。(空穂)

まゐらす

かゝる人こそ世ふおとしましけれど。驚かれ
けるまでぞまもりまゐらす。(枕草紙)

給ふ(る)

かゝる御事を見給ふるよつけて。(源氏)
以上給ふよりらるまでの尊ぶ詞なり。奉るより給ふる

までの卑下する詞なり。されど候ふの尊ぶ方よつきて
用ふる事もあり。その用ひ方の輕重の。古文を味ひてつ
かひ分くべし。

奉る。申すなどの類の。つねの動詞と助動詞を思ひま
がふべからむ。「貢を奉る」「よろこびを申す」の常の動詞
にて。「君は奏し奉る」「神よつかへ申す」の助動詞ありと
知るべし。

其四 命令と願をあらはす

よ 起きよ。(神樂歌)

車もたげよ火かゝげよ。(つれど)

べし 誓言をたつべし。(今昔)

正直ふして約をかたくすべし。(つれぐ)

右のよとべしとい命令の詞あり。

たと家にあるとき(たとの變化)木は

うめさくら。(つれぐ)

なんはや夜も明けあんと思ふ。(枕草紙)

岩の上は旅ねをすればいと寒し

苔の衣をわれまかさなん。(後撰)

右のたしとあんとい他をしあたまほしと願

ふ詞あり。

ばや心あらん人み見せばや。(後拾遺)

いでくうけたまはらばや。(大鏡)

これは自しかせまほしと願ふ詞あり。

其五 推量をあらはす

ん 花見んとて。(古今)

旅の心をよまんとて。(同)

ましやがてかけこもらましかは口をしからまし。

(つれぐ)

同じかたふあらましかは何事もよからまし。

(榮花)

べし 都の歌どもこの後おほくつもりたり。又かき

つくべし。(十六夜)

雨ふりぬべし。(枕草紙)

以上、自の上ふも他の上ふも用ふ。

らん ものゝどいひて火のきゆらんも知らむ。(枕草

紙)

たれふかあるらん。(今昔)

これは現在を推量する詞あり。

らし 獨のみよもあらざりけらし。(伊勢)

露こそこそふ寒からし。(古今)

これの推量して定むる詞なり。

げん いかよくやしかりけん。(今昔)

庭の苔地ふはきけん世も知らむ。(同)

これの過去を推量する詞なり。

めり まどひいづるもあんめり。(枕草紙)

斧の柄もくちぬべきなんめり。(同)

これの輕き推量も用ふるがもとかれど。轉じて
たゞ句調のために添ふるもあり。

其六 意をたしかまする

あり 男もする日記といふものを女もしてみん
どとするあり。(土佐)

秋の野は人まつ虫の聲すあり。(古今)

これの句調を助くると。餘情をもたするとの二
つあり。餘情の方の歌は多く用ふ。但し不完全動
詞と思ひまがふべからむ。

其七 打消をあらわす

を 題しらずよみ人しらむ。(古今)

才多しとてたのむべからむ。(つれづれ)

ざる いづれものがれざるに似たり。(同)

思ひざる。外の修行の道。(謠)

じ 尾が細工によもまさり侍らじ。(つれづれ)

年の内つどもりまでも侍らじ。(枕草紙)

まじ えさぶらふまじきこゝちなんし侍る。(同)

歌よむまじくありて侍れば。(同)

右のじとまじとい推量の打消に用ふ。

あ おみくならんぶるまひせさせ給ふな。(住吉)

ことむをぬたちにおぼしおとすな。(同)

あゝゝゝを

もみぢばを吹きあちらしそ山おろしの風。(古

今)

つきざりあることか。のたまひを。(源氏)

右のなとあゝゝゝを命令の打消に用ふ。

熟字動詞

二つの詞を合せて一つの動詞とせるものを熟字動詞といふ。これを二つに分つ。

一つに名詞と重なりたるもの

ものがたる けしきだつ

虫むむ 日かげる

二つふい動詞の二つ重まれるもの。これふ四つの種類あり。

其一 上下同じ位のもみ

舞ひ歌ふ

見聞く

讀み書く

の類。

其二 上の動詞の力を下みて添ふるもの

いひあへを

聞き入る

いひしろふ

の類。

其三 下れ動詞の力を上にて添ふるもの

あきひく

かきよき

かき廻き

これに指先にて前によきるやうに力を添ふるあり。

ひきさく

ひたもどき

ひきあぐる

あれの手にてひたよきるやうの力を添ふるなり。

うちやる

うちおく

うちきつ

これに投げやるやうの力を添ふるなり。されどうち見る。うち讀むなどの類たゞ軽く添ふるもあり。

さしいだす

さしあぐ

これに手を伸ばして外にやるやうの力を添ふるあり。

其四 下の動詞に進みたる時をあらはすもの

吹き拂ふ

流れよる

折り取る

の類。

動詞の用ひ方

動詞の用ひ方は三つあり。

一つは名詞の従とある。文字はあらはれたるとかくれたるとの別なく。動詞は其はたらきの主とある名詞あり。其主たる名詞のはたらきをあらわすを従といふ。すおはち。

鳥(主)なき(従)花(主)ちる(従)

秋の夜の月(主)こそことふ寒からし(従)

くさむら毎ふ虫(主)のわぶれ(従)ば

の類あり。

二つは名詞の前置とある。これに名詞を形容して前は置くあり。これを形容動詞といふ二つの種類あり。

其一の

曇る空

降りくる雪

いふし日

の類ふて。従はて主を形容するあり。但し「空曇る夜」「雪降る夕」などいふ「曇る」「降る」の詞は空、雪の従とあれば。従とありたるまゝ前置ともおれる詞と知るべし。

其二の

花にまぐ鶯

水にすむ蛙

行く水

照る月

神あらぬ身

の類ふて。其物のもとのよりおあるべきはたらきを形容せるなり。現在おはたらくさまをつよくいふにあらず。

三つふいなかを名詞の意を兼ねる。こまのより動詞として受け。下より名詞として續く詞あり。これを体動詞といふ。まをいち。

驚のおくをよめる。(古今)

うまきばみとる雲のほそくたかびきとるいとあわれなり。(枕草紙)

の類なり。

此のち名詞と稱ふる内ふ。下は續く関係の時ハ此体動詞をも含むと知るべし。

形容詞 名詞の形容に用ふる詞を形容詞といふ。

高き山 尊き神 善き人

樂しき世 二本のお杉 四つの街

の類なり。また問をあらはす形容詞を疑問形容詞といふ。

いかにる山 いくつの國

の類あり。

尊稱をあらはす形容詞ふ。用ひ方のまぎらはしきあり。すなはち。

み おん(又はおはん) お こ
ぎよ

これなり。されど大方に定まりあり。左の如し。

みの古言なれば神聖の物に用ふ。例をきいて用ふべからむ。

御輿 御酒 御代 御民

の類なり。

おん。本語原の詞は用ふ。外語原はても既に本語原の如く親しくなれる詞は用ふるなり。

おん盃

おん宿

おんものまうで

おん經

おん装束

の類なり。

お。おん。の略音なれば。例あるもの、外。文は用ひむ。例あるとい。

お前

お僧

の類なり。

では漢語原の詞は用ふ。

御殿

御即位

御讓位

御神事

御襖

の類なり。

ぎ。よ。漢語原の神聖なるは用ふ。例あるものは限るべし。

御製

御寢

の類なり。

されど句調の都合よりていづれも例外あり。讀經。み曹司。み堂の類あり。

熟字形容詞

他の詞を合はせて一つの形容詞とせるものを熟字形容詞といふ。これを二つに分つ。

一つは名詞をいたゞきたるもの。

ものゝあしき夕 海ちかき里

年久しき松

の類なり。

二つふい他の詞を合はせて用ふるもの。

雨の夜 漫々たる海 幸福かる身

の類なり。

形容詞の用ひ方 形容詞の用ひ方三つあり。

一つは名詞の前へ置く。之を前形容詞といふ。

とほき旅 寒き嵐

の類なり。

二つは名詞の後へ置く。之を後形容詞といふ。すなは

ち。

矢一つ来りて 白き鳥の嘴と足と赤き水の上

ふ遊びつゝ

の類なり。

三つは名詞の従となる。之を従形容詞といふ。すなはち。

月白く風寒し

おく山よもみちふみわけおく鹿の

こゑきく時ど秋の衰しき (古今)

石川やせみの小川の清ければ

月もながれをたづねてぞすむ (新古今)

の類なり。

此のち動詞と稱ふる内より此は形容詞をも含むと知るべし。

四つよりいふかは名詞の意を兼ぬる。これより上よりは形容詞として受け。下より名詞として續くあり。これを体形容詞といふ。すなはち。

物がらのよきがよきあり。(つれづれ)

老いたるあり若きあり。(同)

の類あり。

此のち名詞と稱ふる内より。下より續く関係の時は此は形容詞をも含むと知るべし。

副詞 動詞の形容に用ふる詞を副詞といふ。また形容詞。副詞の形容にも用ふ。

日あたいかお照る

雨をやみかくふる

風よく入る

むかし男ありけり

いそうれし

よもしろし

いかでもらさん

いよ／＼見まくほしき君かか

げよ古人のいひけんやうみ

また問をあらはす副詞を疑問副詞といふ。

い。か。ふ。た。の。ま。ん
お。ど。お。そ。き

の類あり。これらを用ふる時。下の動詞。疑問。また。反
語の意あるあり。

また願と推量とをまめす副詞の下。い。必。ず。そ。の。意。の。詞
を受くるを常とす。

い。か。で。こ。れ。見。は。て。ん。
わ。れ。も。し。世。は。い。で。ば。
大。雪。ふ。い。よ。も。ゆ。か。じ。

の類あり。

前の動詞を受けて後の動詞に係かる副詞もあり。

さ。れ。ば よ。り。て 故。に
さ。ず。が。ふ い。と。ゞ た。ゞ。し
か。く。て さ。て そ。も。く

の類あり。

たゞ軽く文のはじめを呼びおこすもあり。

そ。れ お。よ。そ

の類あり。

こ。い。ひ。お。く。べ。き。事。あり。形容詞に直に名詞に接するを常とすれど。
副詞に然らず。あまたの詞をへだて、動詞に接する事常あり。

熟字副詞

他の詞を合はせて一つの副詞とせるものを

熟字副詞といふ。これを二つに分つ。

一つは名詞をいたゞきたるもの。

ものうくおもふ こゝろだかふかたる

のぶかよ立つ

の類なり。

二つは他の詞を合はせて用ふるもの。

年ゆたかふみのる

夜のそとあけよけり

の類あり。

後詞 二つの詞の間の關係をあらわす詞を後詞といふ。

但し上の詞を直に受くれば下の詞は他の詞をへだてて續く事常

あり。

これを常の後詞。疑問後詞。力後詞の三つに分つ。

常の後詞

常の後詞は左の如し。

名名とあるせるは名詞と名詞の關係。名動とあるせるは名詞と動詞の關係をあらわす詞あり。その他も推して知るべし。

の 浦の波 月の影

庭の草

以上は名名

花のうつくしき

過ぎし昔のこひしければ

涙あめの如くよて

露のこぼるゝ

鶯の鳴く

人のいひし

以上の名動

おもしろのありさまや

あらこひしの昔や

以上の形名

いまはのことは

われかのありさま

みし人もあきが敷そふ露の世は

あらましかばの秋の夕ぐれ。(續後撰)

以上の章句と名詞 但しの文字の入る處は詞を略せるもの多し。

はるかの雲居

清淨の身

以上の名(無形)名 これの熟字形容詞に用ふ。

この後詞を用ひ違へ易き。

雪ふるの日 花を見るの人

の類あり。これらの文字あるまじき處なれば必
ぞつかふべからむ。すべての文字の上の章句を
受くる例の外ふに体動詞の下はおく事あり。

つ 天つ少女 瀧つ瀬 時つ風

これの名名 上の文字は同じ意は用ふ。されど古言なれば例をさものの用ふべからむ。

梅が香 賤が屋 君が代

見るがわびしさ 移ろふがうさ

以上名名

ものからのよきがよきあり。(つれづれ)

君が行く越のあら山まらねども

雪のまふくあそは尋ねん。(古今)

むねをかのおほより越よりまうできたりけ

る時。(同)

我宿の梅の立枝や見えつらん

思ひのほかふ君がきませる。(拾遺)

以上名動 この用ひ方いとかく俗語は流れ

やすければ。よくく注意すべし。

を 笛を吹きすさびて

女は春をあはれむ

戸を推し開く

以上名動

車を下る、

人を別る、

海づらを月出でたり。(十六夜)

以上の名動 ふりの意は用ふ。

をもて をして して

小野道風といふ手かきをもてかゝせ給ひければ。(今昔)

人をしていはせられたれば

以上の名動(他動)

柱のひわれたるはざまはかうがいのさきしておし入れ給ふ。(源氏)

禪尼てづから小刀してきりまはしつゝはられければ。(つれづれ)

これの名動 上のをもての意は用ふ。

よ

都はかへる

春はなる

人よかたる

待つ人の麓の道いたえぬらん

軒端の杉(ノ上)は雪おもるあり。(新古今)

天智天皇の御子(ノ中)は。大友皇子といふ人ありけり。(宇治)

こわだかおなのたまひを屋の上にお居る人ども。の聞く(故)は。(竹取)

きさいの宮の歌合(ノ時)はよめる。(古今)

籬あげたる(時)は見れば。(宇治)

狩衣のうしろの帯(ノ爲)は。ひきゆめられた

るまゝふ。(同)

僧正遍照とたけがり(ノ爲)はまかれりける
ふ。(古今)

日くれかゝる(處)ふとまるべき處とほし。(十
六夜)

以上の名動 但し時。爲。上。中。故。處。な
どの詞を入れて心得べきも多し。

ゆたか。のどか。愉快。

以上の名(無形)動 これの熟字副詞は用ふ。

庭の面のまだかわかぬ。夕立の

空さりげなくすめる月かな。(新古今)

春雨ふ匂へる色もあかくふ。

香さへなつかし山吹の花。(古今)

留むべき物とはなしはあなくも

散る花ぶとまたぐふ心。(同)

以上の動動 これの然。又。の。ふ。などの意
は用ふ。

又秋のうれひの色はむかふあり

尾花が風は庭の月うげ。(玉葉)

あれわたる庭の千草は虫の聲

かきほの鳥のふるさとの秋。(同)

以上の名名(歌詞)

ふて ふして

浦近き山もふて。風いそあらし。(十六夜)

なごさの院ふて。櫻を見て。(古今)

松が枝のかよへる枝をどくらふて。

巢だてらるべき鶴の雛あか。(拾遺)

以上の名動 これの「ふありて」「ふなして」「ふよ

りて」「をもちて」などの意は用ふ。

へ あづまの方へまかりつる人よ。(古今)

北へゆく雁どなくあるつれて来し

数の足らでど歸るべらある。(同)

これの名動 方角をさすお用ふ。ふよ似て輕し。

と

水もかくみえこそわたれ大井川

峰の紅葉の雨どふれども。(後拾遺)

人の世どありてい。(古今)

以上の名動

さていいかゞすべきそのたまひければ。(宇

治)

おいぬればさらぬ別のありといへば

いよ／＼見まくほしき君かあ。(古今)

けふといへばもろこしまでもゆく春を

都ふのみとおもひけるかあ。(新古今)

以上の名詞ふても。動詞形容詞其他ふても。意の

切れたる詞と動詞との間、用ふるあり。とても
此内、ふ含む。

鳥とあそぶ

世とおし移る

蝶とくるふ

以上の名動 これの共の意、用ふ。

雨はら／＼とふる

夜のしら／＼とあけゆけば

以上の副詞とあるべき詞とをへて用ふ。下の
しても「巍々」として「渺々」として「あどやう」は用
ふる時の副詞は添へたるあり。下に別に例を
あげむ。準へて知るべし。

として

下として上をはかるゝ似たり

一人としてなびかぬのをし

以上の名動

て 年くれて春にもかりぬ

法師にかりて山にすむ

風吹きて波いと高し

これの動動 時の進む意に用ふ。

で 夢みちで逢ふ

問ひでもしるし

言ひでものおもふ

これの動動 前ので。文字の打消に用ふ。

つゝ、おぼしやりつゝ、そもし火をかゝげつくして起

きおはします。(源氏)

したしき女房御めのとあどをつかつしつゝ、あ

りさまを聞しめす。(同)

人げあき耻をかくしつゝ、まじらひ給ふ。(同)

これの動動 これに二つの用ひ方あり。一つの

二つのはたらきを同時にする意に用ひ。一つの

同じはたらきをくり返す意に用ふ。

ば 小野にまうでたるに比叡の山の麓あれば雪

いと高し。(伊勢)

夜すあしふけぬれむ。まうともねいりぬ。(宇

治)

桃李ものいね。誰と共にか昔をかたらん。

(つれづれ)

あやしみて見れば。伴大納言なり。(宇治)

曉方にきけば。庭に建しく音のするを。(宇治)

山里の春の夕ぐさ来て見れば。

入相の鐘に花ぞ散りける。(新古今)

天の川浅瀬をならみたどりつゝ、

渡りはてねばあけぞしにける。(古今)

卵の花もいまだ咲かねば。郭公

佐保の山へを来なきとよもす。(萬葉)

道すがら涙おしのでひつゝまうで給ひければ。對面したまふべくもあらむ。(源氏)

以上の動動 これに四つの用ひ方あり。原因をいふと(最初の例)同時をいふと(第二の例)推量をいふと(第三の例)どもの意に用ふると(第四の例)あり。

ども

木の葉をかきのけたれどつやゝ物も見え

を。(つれづれ)

つひに行く道といかねて聞きしかど。

きのふけふといふ思ひざりしを。(古今)

枕がみよてあきかあしめども聞くらんどもおがえを。(つれづれ)

以上の動動

ども

われあからんあどありともあみくならん
ふるまひせさせ給ふな。(住吉)

たそひ耳鼻こそきれうすとも命ばかりいあど
かいきざらん。(つれづれ)

さばれさまでなく。といひそめてん事のそて
かたうあらがひつ。(枕草紙)

風ふくと枝をはなれて落つまじく

花ぞちつけよ青柳の条。(山家)

これの動動 推量の裏返る意に用ふ。但し。この
もの略語にて例あまり多からねむ。みだりに
用ふべからむ。

より 今年より春まりをむる花をれば

散るといふ事の習ひざらん。(古今)

弘法大師さぬきより京へのやり給ひき。(水
鏡)

前よりゆく水をも初瀬川といふなりけり。(源
氏)

蘆にひたる男のかたゐのやうなる姿ある。
此車の前よりいきたり。(大和)

あじろい走らせたる。人の門よりわたりたる
をふと見るほどおろそ過ぎて。(枕草紙)

都の空よりの雲のおきゝもはやそこちし
て。(つれづれ)

一日の命萬金よりも重し。牛のあたひ鬣毛よ
りも輕し。(同)

以上の名動 これに出處をさす。をの意は用

ふると。比較をえめすその三つあり。例につきて
心得わくべし。

から 明けぬから。舟をひきつゝの平る。(土佐)

いつからある事ふかあらん。(空穂)

こどから山でもりして侍るなり。(蜻蛉)

波の音のけさから。ことよ聞ゆるい

春のしらべや改まるらん。(六帖)

これい名動 出處をさすよりよ同じ。

からよ

吹くからに秋の草木のしをるれむ

うべ山風を嵐といふらん。(古今)

これい動動 につれての意お用ふ。

まで 人のみかどのためしまでひきいでさゝめきな

げきけり。(源氏)

遠なるもろこしまでもゆくものの

秋の寢覺のこゝろなりけり。(千載)

涙も落つるまで覺ゆれば。(枕草紙)

日ごろふるまで消息もつかはさむ。(源氏)

以上の名動また動動 これい到りとゞまる點
をさすよ用ふ。

ながら

博雅もよろこびながら庵の内に入りて。(今

昔

たちか。が。ら。ど。平。か。よ。お。は。し。ま。す。御。有。様。を。奏。せ。させ給ふ。(紫日記)

これの動動 つゝの意は用ふ。

萩の露玉ふぬかんと取れむけぬ

よし見ん人の枝を。が。ら。見。よ。(古今)

大臣も御子ども六人を。が。ら。ひきつれておのし
たり。(源氏)

これの名動 これの「のまゝふ」と共ふなどの
意は用ふ。

ばかり

命あるものを見るよ人ばかり。久しきはあし。

(つれづれ)

人のあき跡ばかり。哀しきはあし。(同)

あきぬばかりいへば。(源氏)

人おおもはれんばかりめでたき事をあらじ。

(枕草紙)

これは名動 極度をいふは用ふ。

ほど これほど多き人の中よあどやわが子のなを
やらん。(謡)

これは名動 上のばかりと同じ。

ものから もののゆゑ

あやしく人のまむものから音せ所ぞい思
ひしどかし。(空穂)

まつ人よあら戀ものから初雁の

けさなく聲のなつかしたかゝ。(古今)

秋からであふこそかた女 郎花

天の河原よあら戀ものゆゑ。(同)

以上の動動 これいづれもなれども意は
用ふ。但しものゆゑの歌よのみ用ふるあり。

み 河内の國生駒山を見れい曇りみ晴れみ立ち

ゐる雲やまだ。(伊勢)

僧正僧都かさかりゐて云云たのみ、うらみい。

聲みなかれわたりたる。(紫日記)

これい動動 ならびたる動詞を重ねる時用
ふ。

み (歌詞)

秋の月光さやけみもみち葉の

おつる影さへ見に渡るかな。(後撰)

春のさる霞の衣ぬぎをうすみ

山風よこそみだるべらかれ。(古今)

これい形動 故よの意は用ふ。

疑問後詞

疑問といふは三つあり。疑ひて決しがたき
(問)と。疑ひて自ら決する。疑ひて意を裏返らする(反語)

とあり。用ひ方の輕重ふよりておのづからその差別あり。

これと次のカ後詞とを。置れどころふ定まりなし。名詞よりも。動詞よりも。その他の詞よりも。受くる事自由あり。されど此の後詞は。問ふべた動詞より上は置くと下は置くとの別あり。問と反語とふに下は置く事あれど。大かたに上はあるが文の常なり。

この後詞は文の終ふおくものもありて。問の關係をしめすやないひまたさやうあれど。問に答の詞はかからず動詞を要するものあれば。直接おらずともおの關係の内をはかれずと知るべし。

や 夜やくらき路やまどへる郭公

わが宿をしもをぎがてふなく。(古今)

あいにれとや御覽する。(枕草紙)

見てのみや人よかたらん櫻花

手おとよをりて家づとふせん。(古今)

うゑし時花まちどほふありし菊

うつろふ秋はあいにとや見し。(同)

田舎人の歌ふていあまれりやたらをや。(伊勢)

勢)

我をば思ふや。(枕草紙)

か かや

刀か何ふあらん。(枕草紙)

なにわぎしておるゝよあらん。(今昔)

蛙なくのみあび川は影見えて

今かさくらん山吹の花。(新古今)

秋風の吹上ふたてる白菊の

花かあらぬ浪のよするか。(古今)

侍りたりとかや。(つれづれ)

以上のやゝ似て軽く用ひたり。上は疑問代名詞。

疑問形容詞。疑問副詞のあるとき。これを用ひてやを用ひず。

ど

忘るゝもあるはいかあるぞ。(紫日記)

かくの給ふいたど。(竹取)

これに疑問代名詞。疑問形容詞。疑問副詞をもて

あしかは問をしめし時。その下は直にも用ひ。又

他の詞のあとにも用ふ。

力後詞

意と句調との強弱を助くるに用ふる詞を力後詞といふ。これふ二つあり。従の詞まで力を及ぼすものと。たゞ直接の詞に力を與ふるものもあり。

其一の左の如し。

は 奈良の京に離れ。この京に人の家まだ定まら

ざりける時よ。(伊勢)

秋に來ぬ紅葉に宿ふふりしきぬ

道ふみ分けて訪ふ人もあし。(古今)

待つ人のさはりありて頼めぬ人のきたり。頼

みたる方の事。たがひて。思ひよらぬ道ばかりにかあひぬ。(つれづれ)

これに他の物事より言ひ分くる力をしめす。を文字の下におく時。をむと濁るあり。

も。大友の皇子の時。の政をし。世のおがえも。威勢も。猛あり。(宇治)

文ふも。見えを傳へたる教もあし。(つれづれ) 一年の内も。かくの如し。一生の間も。またしかなり。(同)

我心はるの山へおあくがれて 永々し日をけふもくらしつ。(新古今)

千早振かみよも。きかを立田川から紅お水くゝるとい。(古今)

手枕のすきまの風も。さむかりき みいからはもの物よどありける。(拾遺)

これに他の物事を兼ぬいふ力をしめす。さればうちからべいふもあり。一つをいひて他をあらするもあり。大をいひて小をあらせ。小をいひて大をあらしむる。あどの用ひ方もあるあり。

もそのやうにお宮づかへも。し給いざりけり。(宇治)

わが宿の雪ふり敷きて道もあし

けふこん人をあわれと見よ。(古今)

いよしへを戀ふる寐覺やまさるらん

聞きも習ぬ峰のあらしむ。(後拾遺)

みえはをしふまでの行かん方もあし

こゝろづくしの山櫻かき。(千載)

これに打消の形容詞。助動詞の前は用ひて。その力を添ふるあり。

君がうゑしむら薄虫の音の

しげき野邊ともなりけるかき。(古今)

ちる花にせきとめらるゝ山川の

深くも春のなりけるかな。(詞花)

これになげきの詞の前は用ひて。その力を添ふるなり。

ど おほえ殿といひける所いいたくあれて。松は

かりどまるしかりける。(源氏)

まゐり集まりて(翁丸ヲ)よぶにも今どたち動

く。(枕草紙)

これに押へて指すほどの力をしめす。

春雨にぬれてたづねん山櫻

くものかへしの嵐もど吹く。(金葉)

秋山のしみづいくまじ濁りなば

やどれる月の曇りもどする。(詞花)

かくも文字に重ねて用ふる。末を危む意とある。

かん(古言にていふも)

時の秋になんありける。(伊勢)

柿本の人麿なん歌の聖なりける。(古今)

おれいぞ。同じ意に用ふ。但し歌に用ふるは少かし。

こそ 物のあはれい秋こそまされ。(つれづれ)

野分のあしたこそをかしけれ。(同)

まふどの鬼神といふものの。道理を知りてまがらねばこそ恐ろしけれ。(今昔)

思ひいで、忍ぶ人あらんほどこそあらめ。又ほどあぐうせて。聞き傳ふるばかりの末といふあれとやは思ふ。(つれづれ)

こそを押へたるえの、内より撰び取るなどの力をしえす。これに意を内に取り入るゝと。外に投げ出だすとの二つあり。今こそ秋よ二月こそ出ばれ」の類もさを詞をつよくいへるなれば。内に取り入るゝあり。人こそ見えね秋を来にけり」今こそあれ我も昔は」の類は秋の来つる事と。我も昔も云々の事をいふ爲に。人を見えぬにもせよ。今もかくあるにもせよと。他の事をいひ捨つ

るなれむ。外に投げいだきなり。おほ例につきて
その差別を心得べし。

思ふこそいもでやみなん春霞

山路もちかし立ちもこそさけ。(拾遺)

みかりする交野の清野はふる霞

あかかまだき鳥をたて立て。(新古今)

かくと。文字に重ねて用ふる。末を危む意をか
る事もどに同じ。

すべてどかんこそ。その詞は右にいへる如くつよき
意ならでも。たゞ句調の重みをもたするため
用ふる事おほし。例をひやく考へわとすべし。

其二の左の如し。これを助詞ともいふ。

し 春雨のふるに涙かさくら花

ちるを惜しまぬ人しふけれむ。(古今)

うゑしうゑば秋なき時や咲かざらん

花こそちらめ根さへ枯れめや。(同)

これに弱き句調をつよむるは用ふ。歌の母音
の句中に在る時。この後詞を置きてわざ／＼字
數を増すことも多し。「名ふおのゝ」を「名ふしおの
ば」とし「舟をどおもふ」を「舟をしど思ふ」とする
類なり。

しも 位たかくやんでとなきをしも勝れたる人どや

いふ。(つれづれ)

むかしへや今もこひしき郭公

故郷よしもなたてたぬらん。(古今)

これは上のし文字は似てつよし。

を
童ことよてい何かせん。おんあ翁をしつべ
し。(土佐)

さりともあていわが子よてをあれよ。(源氏)

同じことよ。かくてをなくかりなん。(宇治)

萩が花ちるらん小野の露霜よ

思れてを行かんさよはふくとも。(古今)

これいつまりたる句調を由るむるふ用ふ。

秋の田のかりほの庵の苫を荒み

我ころも手は露よ思れつゝ。(後拾遺)

春の野はすみれつみよと来し我ど

野をなつかしみ一夜ねふける。(萬葉)

これの同じ意をがらみ。文字を受くる形容詞の

前に用ふ。但し歌に限れり。

に
夜いたゞ明けに明く。(源氏)

たゞいひにいひ放てば。(同)

四五騎もがり馬を海にうちおろしてたゞ渡り

に渡りければ。(宇治)

たゞよわりによわり。(謡)

これにはたらきの専ある力をえめすに用ふ。大方の同じ動詞の間ふあり。

そ いきそ。しいけるものいづれか歌をよまざりける。(古今)

あり。そある人の姿かたちこそよつくろひ。(枕草紙)

まばしとも我もそゞ免じ春の内い來。そ來ん人を花ふまかせて。(讃岐集)

わが來つる方も知られをくらぶ山

木この木の葉のちりそ。まがふふ。(古今)

これにはたらきの専あるをえめす事前のよ文字

ふ同じ。たゞ詞はより句調はよりて用ひ方は差別あるのみ。

や (歌詞)

なよはづよ咲くやこの花冬でもり

今の春べとさくやこの花。(古今)

いづてふか駒をつあがん朝日こが

さきや岡邊の玉ざゝの上よ。(神樂歌)

これは句調をゆるむるよ用ふ。またこれを地名の間よおくもあり。のといふべきところ。又の上よも添へて用ふるなり。左の如し。

わが心なぐさめかねつ更料や。

をむすて山よてる月を見て。(古今)

何となくものを哀しき菅原や

ふしみの里の秋のゆふ暮。(千載)

接續詞 別々の詞章句をつなぎ合はす詞を接續詞といふ。

後詞と思ひまがふべからむ。後詞の意の關係をしめし
まあり。これはたゞ詞のみにて意は別々に獨立せるか
り。

すみち。

雨ふると日てると。(枕草紙)

人の笑ふとはらだつと。(同)

殿下および百官施行といふ宣旨下り。(榮花)

拾遺および金葉。(興儀抄)

歌や詩など。(大鏡)

忠峯や躬恒。(同)

の類あり。これに多くの他の種類の詞を借り。又合はせ
て用ふ。合はするとい「さて」又「の」類をいふあり。中
ふもとい軽くおよびい重し。重き方の心して用ふべし。歌
あどよい更し用ひぬあり。やい輕けれどもいやしきふ似
たり。これも心すべし。と文字の詞章句の間ふ一つのみ
用ふると。下の詞の後ふも添ふるとの二つあり。いづれ
も意にかはらむ。

感詞 感動の聲をまめを詞を感詞といふ。およびしての呼

びかくる聲をも含む。

これは章句の前はおくものと。章句の後はおくものの
二つあり。

章句の前はおくものを前感詞といふ。左の如し。

あな あなや

あな戀し今もみてしが山賤の

かきほふ咲ける大和をでして。(古今)

まかぐの事はあなかしてあそのため忘む

ある事ぞ。(つれづれ)

あな心う鳥とりてんとて。(宇治)

あら 悲し我を助け給へ。(同)

あらあつやとて。ときんをぬぎてをむふさし

おく。(太平記)

あらめづらしやいかふ義經。(謡)

あらさむやひや、かや。(同)

あゝ いかよせん。

あゝれ あゝれや

常よりもさやけき秋の月を見て

あゝれ戀しき雲の上かな。(後拾遺)

あるいふくさきの數をふ世の中は

あゝれいづれの日まであげかん。(新古今)

あゝれ都にありし時の。(謡)

以上いづれも同じやうの意ふ用ふ。されどあ
な。古体あら。其次。あ。の。近体と知るべし。

あ。の。れ。の。ふ。の。三つよりもや。つよし。

や。お。の。れ。か。く。も。あ。り。け。る。の。 (今昔)

や。思。ひ。い。で。た。り。あ。り。し。世。の。 (謡)

や。月。お。と。い。で。候。へ。 (同)

以上の驚き。またの思ひ出しに用ふ。

あはや

あ。は。や。法。皇。の。流。さ。れ。給。ふ。ぞ。や。と。て。 (平家)

これも驚きふ用ふ。

すは
すはや

す。は。ま。れ。も。の。よ。物。見。せ。ん。と。 (謡)

す。い。や。よ。せ。く。る。浦。の。波。 (同)

す。い。敵。人。の。亂。れ。あ。ひ。 (同)

これも驚きの強きに用ふ。

の。う。御。ら。ん。ぜ。よ。 (謡)

の。う。そ。の。河。を。渡。り。給。ひ。を。申。す。べ。き。事。の。候

ふ。 (同)

の。う。あ。れ。な。る。御。僧。 (同)

これに輕き呼びかけふ用ふ。

や
やあ

や。あ。い。か。よ。あ。れ。な。る。の。佐。野。源。左。衛。門。尉。常

世か。(謡)

やあ何とてあの強力に通らぬぞ。(同)

これの強き呼びかけは用ふ。

いやいやこの事また人は語り給ふな。(盛衰

記)

いや我の父もかく母もなし。(謡)

これの否む意は用ふ。

章句の後お置くものを後感詞といふ。左の如し。

やいとやすらかある御ふるまひありや。(源氏)

中納言の法衣にあり給ひふしをあれなりしか。櫻あどの散りぬるもなほ世の常あり

や。(榮花)

物ぞお不えぬや。(紫日記)

これと呼び出だせやうふ歌に用ふる事あり。左の如し。

むさしのや行けども秋の果どあき

いかなる風の末は吹くらん。(新古今)

みしまえや霜もまだひぬ葦の葉に

つのぐむほどの春風を吹く。(同)

かいそかなしき事ありか。(大鏡)

すぎものかりかしか。(同)

も(歌詞)

秋たちて幾日もあらねど此ねぬる

あさけの風の袂すゝしも。(拾遺)

神代より津守の浦に宮居して

へ照らん年の限しらをも。(千載)

かし いみじかりし御榮花ぞかし。(大鏡)

なげく人もありけんかし。(つれづれ)

もや いさりせんと思ひざりしもや。(源氏)

手をかき歌をよくよみしもや。(空穂)

川づら涼しからんもや。(源氏)

世の中をはかきものどもささぐきの

うもるゝ山になげくらんはや。(蜻蛉)

に あふまでのかたみも我のあにせん。

見ても心のあぐさまなくに。(古今)

以上のまへて詞の切れたる處に置く。また他の

感詞の下に重ねて置く事もあり。

か ほしきものぞおもえらんども今めくものか。

(土佐)

ふしをがみて肩にどうちかけて舞ふものか。

(枕草紙)

かあ 物語の女の心地をしまへるかな。(紫日記)

人の心は愚なるものかな。(つれづれ)

かも (古言)

沖つ波よするなりをを数妙の

まくらとまきておせ君かも。(萬葉)

右の三つを「てし」「よし」「も」などの後詞はつゞけ
濁音に用ふる時の。餘情の内は願の意をもつ詞
となる。すおはち。

あを戀し今も見えてしが山がつの

垣ほふ咲けるやまと撫子。(古今)

久方の月の桂も折るばかり

家の風をも吹かせてしがな。(拾遺)

伊勢の海に遊ぶあまともありにしが

浪のきわけてみるめかづらん。(後撰)

世の中よさらぬ別のなくもが。

千代もどいのる人の子のため。(古今)

世の中は常はもがもを渚こぐ

あまの小舟の綱出かかしも。(新勅撰)

よ。かの君の御はらから大納言高砂うたひし

よ。(源氏)

筏士よまでこと問はん水上の

いかばかり吹く峰の嵐ぞ。(新古今)

これの呼び掛けにも用ふ。

は。夜中もすぎにけんかし。風や、あらくしう

吹きたるは。(源氏)

これみよまことおおいしたるい。(宇治)

これの對語の詞はおほく用ふ。よふ似てや、強し。

をつひ行く道といかねて聞きしかど

たのふけふその思はざりしを。(古今)

たのふさばかり有りけんものを。(枕草紙)

これの裏返る餘情をもたするふ用ふ。

ど はじめの横川に住ませ給ひしぞかし。後ふの

多武峰に住ませ給ひた。いそいみじく侍りし

事ぞかし。(大鏡)

花薄まねかばこゝおとまりなん

いづれの野へもつひの住みかど。(詞花)

これのさし示すやうの意ふ用ふ。

以上かよりぞまでの。名詞またの体動詞は續く

るを常とす。但しかあのがあそある時の類の例

外あり。又よの切る、詞より受くる事もあり。心

得おくべし。

こゝふ七品詞の種類を繰り返して表ふ示すべし。

實名詞

名詞

人代名詞

代名詞 指示代名詞

疑問代名詞

動詞

自動詞
自然言
他動詞
被然言
從動詞
形容動詞
體動詞

……
體動詞

形容詞

常の形容詞
前形容詞
後形容詞
疑問形容詞
從形容詞

副詞

常の副詞
疑問副詞

後詞

常の後詞
力後詞
疑問後詞

接續詞

感詞

前感詞
後感詞

問 題

- 一。のふつゞく代名詞とがふつゞく代名詞とをあげよ
- 二。熟字名詞の例をあげよ
- 三。自動詞と他動詞との差別をしめせ
- 四。被然言と自然言との例をあげよ
- 五。助動詞といいかあるものぞ
- 六。熟字動詞の種類をあげよ
- 七。動詞の用む方を一々にしめせ
- 八。御の詞の用ひ方をしめせ
- 九。形容詞の用ひ方を一々にしめせ
- 十。後詞の内名名と名動との例をあげよ
- 十一。ば。文字の用ひ方はいく種類あるぞ
- 十二。疑問後詞に三つの差別ありとは何々ぞ

十三 カ後詞をしめせ

十四 章句の後ふ置く感詞はいく種類の用ひ方あるぞ

十五 かとかを濁音として用ふる時のいかなる意ふ變はるぞ又いかなる
詞の下ふ来るべきぞ

詞の活用

詞の用ひ方によりて末の一二音の變化すべきものあり。
この變化を活用またいはたらきといふ。そのはたらき方
によりて之を用言。形狀言の二つに分つ。

語身語尾

用言。形狀言の變化すべき部分を語尾とい
ひ。變化するべき部分を語身といふ。

一言の詞ふて全くはたらくものあり。これに語身と語尾とを兼ねたる詞
と知るべし。

用言 用言の動詞の活用あり。これを四段。上二段。下二段。

一段の四つに分つ。

四段の活用

あ。い。う。え。の四列に語尾のはたらくを四段の活用といふ。か。さ。た。は。ま。ら。の行は限るあり。この活用の動詞の大方をまむるものにていと廣し。すなわち。

ア イ ウ エ

行か 行き 行く 行け

指さ 指し 指す 指せ

勝た 勝ち 勝つ 勝て

言は 言ひ 言ふ 言へ

酌ま 酌み 酌む 酌め

織ら 織り 織る 織れ

此活用の後詞にて文字ふつゞく時。その語尾をよび變ふる事あり。すなわち。

「行きて」の 「行いて」ぞあり

「指して」の 「指いて」ぞあり

「勝ちて」の 「勝つて」ぞあり

「言ひて」の 「言うて」ぞあり

「酌みて」の 「酌んで」ぞあり

「織りて」の 「織つて」ぞあり

上下二段の活用

ウ。の語尾をもつものを二段の活用といふ。この語尾のウ。がい列の音ふはたらくを上二段と

上二段のきちひみいりの行は限るなり。すなわち。

イ
ワ
ウ
ウ
れ

起き
起く
起くる
起くれ

落ち
落つ
落つる
落つれ

強ひ
強ふ
強ふる
強ふれ

試み
試む
試むる
試むれ

報い
報ゆ
報ゆる
報ゆれ

下り
下る
下る、
下るれ！

卒ぬ
卒う
卒うる
卒うれ

この活用ハツるの語尾をまりて。イ[○]るの語尾となるを特
點とす。すゐ[○]ち。

「起くる」
「起きる」とあり

「落つる」
「落ちる」となり

強ひる。となり

「試みる」となり

「報ゆる」に

「下る」の
「下りる」となり

卒○うるに
卒○ぬるに

下二段のいづれの行ふもあり。すゐち。

工
ツ
ツ
る
ツ
れ

(得)え う うる うれ

受け 受く 受くる 受くれ

馳せ 馳す 馳する 馳すれ

捨て 捨つ 捨つる 捨つれ

兼ね 兼ね 兼ねる 兼ねれ

替へ 替ふ 替ふる 替ふれ

留め 留む 留むる 留むれ

消え 消ゆ 消ゆる 消ゆれ

枯れ 枯る 枯るゝ 枯るれ

植ふ 植う 植うる 植うれ

この活用ハウ。の語尾なまりて。エ。の語尾とあるを特
點とす。まゐりち。

「う。」 「え。」とあり

「受く。」 「受け。」とあり

「馳する。」 「馳す。」とあり

「捨つる。」 「捨て。」とあり

「兼ねる。」 「兼ね。」とあり

「替ふる。」 「替へる。」とあり

「留むる。」 「留める。」とあり

「消ゆる。」 「消える。」とあり

「枯るゝ。」 「枯れる。」とあり

植
う
る

植ゑる。となる

一段の活用

一段の活用

イ。る。の。語。尾。を。も。つ。も。の。を。一。段。の。活。用。と。い。ふ。こ。の。イ。音。は。た。ら。く。事。な。し。い。き。ふ。ひ。み。の。行。み。限。る。み。り。す。な。い。ち。

4

ある

个孔

鑄

鐵
る

鑄
孔

署

普
乙

著
れ

似

做

似
机

十

千
る

千九

見

見
る

見れ

居

居
る

居礼

この活用のイ列音の更なる變はらぬを特點とす。また以上の例の外に「射る」「煮る」「噓る」「卒る」の詞のみふていと狭し。

又エ。る。の語尾をもちて。一段又はたらくもの。をないち蹴。る。の類あり。されど多くも例なければ。一段の變格と心得おくべし。

變格 四種の活用の正格にもづれたるものを變格といふ。四つあり。ら行變格。ゐ行變格。か行變格。さ行變格これみり。

ら。行變格

ら行變^ニ初^ニ四段^ノ屬^ク。

7

1

7

工

有ら 有り 有る 有れ

居り「侍り」また不完全動詞に此活用あり。四段の正格に
ことある點に。り。その語尾はあり。正格のり。音に續く
詞みれど。變格のに切る、詞あり。すなわち。

正格 魚を釣る 鐘鳴る 人歸る

變格 さふ侍り 人居り 心有り

の如し。

か。行變格 か。行變格も四段に屬く。

ア イ ウ ヲ
ウレ

往な 往よ 往ぬ 往ぬる 往ぬれ 往ぬ

死ぬ。も此活用あり。これに「ぬる」「ぬれ」の語尾の増したる

をことある點を。されどふ音のて。文字に續く時「往ん
で」にみれば。四段に屬く事もちろんなり。

か。行變格 か。行變格に上下二段に屬く。

オ イ ウ ヲ
ウレ

(来)こ きた くる くれ

これに此詞に限れり。此詞にて音をもつを異なる點とす。

さ。行變格 さ。行變格に上下二段に屬く。

エ イ ウ ヲ
ウレ

(爲)せ し す する すれ

これも此詞に限れり。此詞にせ。しの二音ふはたらくをこ
とある點とす。かくて名詞を直ふ動詞とし。及び外語原の

動詞を用ふるふ。此詞を語尾としてはたらかするなり。
すあひち。

く。み。す

あ。た。す

つ。み。す

禁。を。

信。を

道。遙。を

の類あり。

あは次々あぐる例ふつきて。四種活用の差別をたしかめ
心得おくべし。

四段ハ

置く

巻く

吹く

咲く

押す

蒸す

正す

成す

打つ

持つ

分つ

放つ

思ふ

歌ふ

乞ふ

喜ぶ

産む

編む

富む

望む

儲る

賣る

振る

當る

上二段ハ

過ぐ

朽つ

綻ぶ

懸ぶ

恨む

老ゆ

悔ゆ

舊る

下二段ハ

下ぐ

砕く

掛く

投ぐ

馳す

載す

失す

仰す

當つ

撫づ

企つ

果つ

重ぬ

はぬ

委ぬ

列ぬ

教ふ	競ぶ	總ぶ	くぶ
矯む	定む	埋む	崇む
覺ゆ	殖ゆ	映ゆ	吹ゆ
垂る	觸る	流る	馴る
飢う	据う		

形状言 形状言の形容詞。副詞の活用なり。これをきの活用。しきの活用の二つに分つ。

きの活用 前形容詞の時。きの語尾をもつものをきの

活用といふ。すなわち。

清く 清し 清き 清けれ

しきの活用 前形容詞の時。しきの語尾をもつものを

しきの活用といふ。きなはち。

久しく 久し 久しき 久しけれ

この語尾のし音を重ねて。久し、などいふ俗語の誤れば用ふべからず。

以上二つながら。従形容詞の語尾に同じくし音なり。このし音の他の音に變へると。し音が動かをして。他の音の加へるとの別あるなり。

次はあぐる例ふつれて其差別を心得べし。

きの活用の

深し	浅し	赤し	白し
輕し	重し	暑し	寒し
辛し	甘し	近し	遠し

しきの活用の

おなじ

表中は片假名もて記すに其受くる詞どもと知るべし。

用言五階の圖

上	段	四
強 落 起	織 酌 言 勝 指 行	將然言
ひ ち き	ら ま は た さ か	
シ ナ バ ム ン ヤ	マ シ ン デ ジ ス	連用言
ひ ち き	り み ひ ち し き	
ミ ナ ツ ガ ラ	キ タ ケ ケ リ ン リ ヌ ツ テ	終止言
ふ つ く	る む ふ つ も く	
ナ バ カ リ	ト メ マ ペ ラ ラ モ リ ジ シ ン	連体言
ふ つ くる る る	る む ふ つ も く	
ふれ つれ くれ	れ め へ て せ け	既然言
ド	バ	

段 一						段			
(居)	(見)	(干)	(似)	(著)	(鑄)	植	枯	消	留
ゐ	み	ひ	に	き	い	ゑ	れ	え	め
シム		ナン		バヤ		パ			
ゐ	み	ひ	に	き	い	ゑ	れ	え	め
ミ		ナガラ		ツ		キ		タリ	
ゐる	みる	ひる	にる	きる	いる	うる	る	ゆる	む
ナ		バカリ		ト		メリ			
ゐる	みる	ひる	にる	きる	いる	うる	る	ゆる	む
ゐ	み	ひ	に	き	い	う	る	ゆ	む
れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
ド									

和漢の音

活用の五階

六十二

二 下						段 二			
替	薫	捨	馳	受	(得)	卒	下	報	試
へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	り	い	み
マ	ン		デ		ジ		ス		
へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	り	い	み
ケ	ケリ		ヌ		ツ		テ		
ふ	ぬ	つ	を	く	う	う	る	ゆ	む
マ		ベ		ラ		ラン			
ふ	ぬ	つ	す	く	う	う	る	ゆ	む
る	る	る	る	る	る	る	る	る	る
ふ	ぬ	つ	す	く	う	う	る	ゆ	む
れ	れ	れ	れ	れ	き	れ	れ	れ	れ
バ									

和漢の音

變さ 變か 變な 變ら

(爲)	(采)	死 往	也 侍 居 有
せ	こ	か	ら
シ レ カ	シ レ カ		
し	き	に	り
	シ シ カ (キ)		
き	く	ぬ	り ト モ
する	くる	ぬる	る
			ナバメマベララ カリジシシン リ
すれ	くれ	ね ぬれ ○ ドバ	れ

この表はあらせむ外ある。他の詞は續くものあれど。一般の例をあらぬ
一々詞はつきて學ぶべし。

一階の將然言を名づく

四段とか行變格の外に。よ文字を加へて命令は用ふ。
但し歌は。よ文字なし用ふる事もまれあり。
すあいち。

得	下り	報い	落ち	起き
---	----	----	----	----

活用の五階

馳	替	植	著	見	居	こ	せ	こ
せ	へ	ゑ						
ヨ								

「る」「らる」「す」「さす」の助動詞(自他よても敬語ふても)

い。この一階より受く。但し四段い。「る」「す」の方を用ひ他の活用い「らる」「さす」の方を用ふ。すゐち。

行	指	勝	言	酌	織	有	往
か	さ	た	は	ま	ら	ら	あ
ス　　ル							
起	落	馳	替	鑄	居	こ	せ
き	ち	せ	へ				
ラ　　ス							
他の段							
四　　段							

されど一段のすを用ふる事もあり。「見^〇する」「着^〇する」の類あり。

ら。行變格の。正格からば三格より受くべき（「らん」「らし」の類の）詞を四階より受く。但し「とも」の正格にかゝらむ。

か。行變格を。行變格の此階より「し」「しか」「し」「しか」のきの活用）を受く。すなわち。

せ	こ
シ カ	
し	き
キ	シ シ カ キ

但し右に示す如くか。行の方のきを受くる事あり。又「し」「しか」を二階よりもまれに受くるあり。そ。行の方のきを二階より受くる。正格も同じ。

右の「せし」「せしか」より思ひたがへて。四段のさ。行。すなわち「指す」「成す」の詞より「指せし」「成せし」とやうに受くるの誤あり。これの「指し」、「成し」とこそいふべきを。はたらきの似たるにて誤れるおれはよく注意すべし。

さ。行變格はりの助動詞を此階より受く。下の五階の處を見るべし。

此階より受くるは。文字の推量のなり。

二階の連用言と名づく。

他の動詞に續くるに用ふ。すなわち。

二階	他の動詞	行き	指し	言ひ	酌み	起き	落ち	馳せ	留め	著	見
		マヨフ	シメス	ハナツ	カハス	アガル	キタル	ユク	オク	カフ	ワタス

有り	し
アフ	ツクス

動詞形容詞の全き形より采れる〔給ふ〕〔奉る〕〔がたし〕〔やすし〕の類の助動詞に。すべてこれより受くるあり。

此階の詞の上ふか。文字を置き。下よ。文字を置けば禁止の詞とある。すなわち。

行き	勝ち	酌み	起き	ナ
				落ち
				ソ

し	き	見	著	留	馳
				め	せ

此下のと文字を略して「雲あたるびき」などいふ事。歌に例あり。されど上のふ。文字を略する事に決してあし。

此階のそのまゝ名詞とある。すなわち。

朝。ゆ。さ。御。ゆ。さ。手。お。り。む。く。い。

冬。が。れ。田。う。ゑ。

沙。干。物。見。

生。き。死。ふ。往。き。来。

また熟字名詞の前の詞にも用ふ。すなわち。

勝。ち。軍。讀。み。人。

朽。ち。葉。老。い。松。

埋。み。火。植。ゑ。木。

鑄。も。の。似。が。ほ。

假ふ讀み切る詞も用ふ。すなわち。

御。前。の。つ。が。れ。ば。前。裁。お。ど。植。ゑ。ま。せ。ゆ。ひ。て。い。

とをかし。(枕草紙)

冬の来て山もあらゝ木ノ葉ふり。
のこる松さへ峰ふさびしき。(新古今)

三階の終止言と名づく。

獨立して切る、詞小用ふ。すゐち。

鳥の子のまだ雛あがらちていぬ。

かひの見ゆるゝ巢守かりけり。(拾遺)

大宮のうちまできこゆあびきすと

あごとのふるあまのよび聲。(萬葉)

立田川もみち葉あがる神あびの

みむろの山ふ時雨ふるらし。(古今)

されば切る、詞より受くる後詞。感詞。この階

の下ふ来へきものぞ知るべし。今これをくり返さ
ば。

行く	指す	起く	落つ	受く	馳す	着る	見る	有り
	ト	トモ	ヤ	ナ	モ	カシ	ハヤ	

往ぬ	く	す

疑問後詞の内。問ひかゝるや。文字に。此階より受くる
あり。すあいち。

言ふ	織る	起く	試む	馳す	消ゆ
ヤ					

着る	見る	有り	往ぬ	く	す

助動詞のありを。この階より受くるあり。すあいち。

秋風ふはつ雁がねぞ聞ゆある

たが玉章をかけて来つらん。(古今)

高砂の尾上のかねの音すあり

あかつきかけて霜やおくらん。(千載)

四階の連体言と名づく。

名詞は續くるは用ふ。すかへち。

行く	酌む	織る	落つる	卒うる	受くる	捨つる	枯るゝ
水	酒	機	木の葉	兵	恩	命	草

見る	居る	有る	死ぬる	来る	する
物	雲	世	身	人	事

体動詞ふは此階を用ふ。すかへち。

賀茂の社のゆふだまきとうたひたるいそを

かし。(枕草紙)

雲のやうくまろうなりゆくもいそをかし。

(枕草紙)

まさしくありし心地のきる。我ばかりかく
思ふふや。(つれづれ)
故に名詞より受へべき後詞。感詞。不完全動詞の
此階より受へるなり。之を繰り返さば。

行く	指す	起くる	落つる	受くる	馳せる
ガ	ヲ	ニ	ヨリ	カラ	マデ
カ					

疑問後詞の内。問ひかくるか。文字に此階より受くる
なり。すなわち。

着る	見る	有る	往ぬる	くる	もる
カナ	ヨ	ハ	ヲ	ガ	ナリ

言ふ	織る

起くる	試むる	馳せる	消える	着る	見る	有る	往ぬる	来る	もる
カ									

五階の既然言と名づく。

四段の此階を命令ふ用ふ。又い。や。文字を加へても用ふ。稀い。よ。文字を加ふる事もあり。但し。行變格のね。文字の方を用ひてぬれを命令ふ用ふる事なし。
をか。い。ち。

行け	指せ	勝て	言へ	酌め	織れ
行け	指せ	勝て	言へ	酌め	織れ
ヨ ヤ					

有れ	往ね
有れ	往ね

四段に此階よりりの助動詞を受く。りの助動詞にてれどさ。行變格その外。受くる事をし。今これを合はせて左に示さん。(一階の下見合はすべし)

行け	指せ	勝て	言へ	酌め
			り	

織れ	せ
----	---

但し四段變格よりの受くる事をし。また四段とさ。行變格の外に「受けり」「教へり」「卒あり」など受くるに誤あり。思ひまがふべからむ。三階より受くべき感詞れや。文字を。歌に此階より受くる事あり。すなわち。

雨ふれば小田のますらを暇あれや。
苗代まづを空まかせて。(新古今)
津の國の難波の春の夢なれや。
芦の枯葉は風わたるなり。(同)
また疑問後詞のや。文字を反語に用ふるより。此階より

しを思ひ給へ侍る。(動詞)(源氏)

いせゝまぐ(二階)虫の音しげみ浅茅生に

露おきそふる(動詞)雲の上人。(同)

動詞にするより。この階より何りの動詞を受け。とのく音を。音を約むるなり。すなわち。

「清くあり」を 「清かり」を

「久しくあり」を 「久しかり」を

名詞にするに。語尾を除きても用ひ。又除きとるもの。を音。音を加へても用ふ。すなわち。

夜あが 筆ぶと 夜さむ

手がる 里ぢか まぶか

深	浅	赤	白	あかし	をかし	なつかし
		サ			ミ	

三階(終止言)

従形容詞の外用ふる事なし。

これに獨立して切る、詞あれば。切る、詞より受

くべき後詞。感詞の此下ふ来べき事用言ふ同じ。
すあいち。

清し	永し	久し	樂し
ト	ナ	モ	カ
ヤ	ハ	シ	ヤ

疑問後詞の問ひかくるや。文字を受くる事も。用言
ふ同じ。すあいち。

清し	永し
ヤ	

四階(連体言)

前形容詞にも後形容詞にも用ふ。前形容詞の時、直
に名詞小續くるを常とす。すあいち。

久し	樂し

清き	永き	久しき	樂しき
月	年	松	世

体形容詞にも用ふれば。名詞より受くべき後詞。感

詞。不完全動詞に此下ふ来べき事。用言に同じ。す
みち。

清き	永き	久しき	樂しき
ニカ	カラ	ヨカ	ヲナリ
ヨヲ	カマ	ハナ	ナデリ

熟字名詞。その外同じ。どの詞に。語尾のき音を略して用ふる事おほし。すみち。

長々し(キ)夜

かみし(キ)子

わか(キ)松

あま(キ)菜

同じ(キ)年

同じ(キ)心

疑問後詞の問ひかくるか。文字を此階より受くる事。用言に同じ。すみち。

清き	永き	久しき	樂しき
カ			

五階(既然言)

従形容詞を後詞に續くるに用ふ。其他に何事も動詞に同じ。

助動詞の活用 助動詞の活用の種類よりて四つに分つ。
用言狀助動詞。形言狀助動詞。特狀助動詞。体助動詞これなり。

用言狀助動詞

用言狀助動詞は。次に示す例外を除きてい。をべて用言の規則に従ふものをいふ。

獨立の動詞より出で、助動詞とされる「給ふ」「奉る」の類の二詞は。皆この活用にて。用言の規則の異なる点をければ。示す必要はす。

ら		上の動詞
行	け	將然言
ら	マシ	連用言
り	ケン	終止言
る		連体言
れ		已然言

行	變	格	行	變	行
行き	け	行	か	行	か
たら	け	め	ら	め	ら
ンマシ	バ	ンマシ	バ	ンマシ	ンマシ
たり	○	め	り	め	り
ケン	ケン	ケン	ケン	ケン	ケン
たり	け	め	り	め	り
ンマシ					
たる	ける	める	ざる	ぬる	ぬる
たれ	けれ	めれ	ざれ	ぬれ	ぬれ
バ					

格						下						二						段					
						行き						受け						行か					
						て						られ						せ					
バ						マシ						用言						ジ					
						て						られ						せ					
ケン						ケリ						用言						ジ					
						つ						る						す					
ラシ						ラベ						用言						ジ					
						つる						る						する					
						つれ						るれ						すれ					
						バ						ド											

この助動詞の用言に異なる點左の如し。

其一 階と受詞と不足あり。

階の不足には空位を置き。受詞に用ふるものゝみをしるせり。但し連体言はすべて用言よかはらむ。

其二 連用言より他の動詞に續く事あり。但し末のるよりしむまで五つの詞に。すべて用言よかはらむ。

其三 連用言を假に讀み切る詞に用ふる事なし。これよりしむまでの用言にかはらむ。

形言狀助動詞

形言狀助動詞は。次は示す例外のほか。すべて形言の規則に従ふものをいふ。

Abstract

000000

思ふ	思ひ	
	せ	
	バ	
らん	き	けん
らん	し	けん
めら	しか	けめ
ド		

体助動詞

体助動詞は終止言ふのみ用ひて。他の活用を持たぬものをいふ。すなわち。

勝つ	か	勝た
ちあ	勝ち	じばあ
し	そ	やん

右のらしをら行の詞より受くる時。る音を略して用ふる事おぼし。
「け(ル)らし」「あ(ル)らし」の類あり。

こ、ふ同音の詞はてまぎれやまきものを。繰り返して左
ふ示すべし。

は
力後詞
感詞

ふ
助動詞
常後詞
力後詞
感詞

常後詞(二)

力後詞

接續詞

常後詞

を 力後詞

感詞

か 疑問後詞

感詞

が 常後詞

感詞

よ 助動詞

感詞

力後詞

ど 疑問後詞

感詞

を 助動詞(二)

感詞

おん 助動詞(二)

力後詞

疑問後詞

や 力後詞

接續詞

感詞(二)

て 常後詞
も 力後詞
感詞

問 題

- 一 詞の活用と、いかあるものぞ。
- 二 四種の活用の特点をそれ／＼あげよ。
- 三 左の詞は何種の活用あるかを。一々しるせ。

明く	誰く	與ふ	仰ぐ	預く	集む
争ふ	改む	應ゆ	厭ふ	浮く	動く
後る	送る	生ふ	追ふ	書く	駐く
買ふ	霞む	掠む	繰る	答ふ	越ゆ
削る	汚す	志す	授く	奏す	信す
制す	示す	蔑る	沈む	進む	調ぶ
閉づ	解く	答む	務む	盡く	突く
垂る	告ぐ	繼ぐ	習ふ	残る	冷やす
更く	始む	舞ふ	燃ゆ	亂る	命ず

申す 養ふ 酔ふ 忘る 終る 惜む

四 正格と變格との活用の差別をしるせ。

五 五階の名と其つとめとを一々あげよ。

六 助動詞の活用の種類と。それら屬くべき詞とをしるせ。

